

氏名(本籍)	やまぐち 山口 豊 (茨城県)
学位の種類	博士(ヒューマン・ケア科学)
学位記番号	博甲第6564号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	思春期「自傷行為」の心理社会的要因とSATイメージ療法による予防支援
主査	筑波大学准教授 博士(学術) 橋本 佐由理
副査	筑波大学准教授 博士(医学) 森田 展彰
副査	筑波大学助教 博士(心理学) 大谷 保和
副査	独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 薬物依存研究部診断治療開発研究室長 医学博士 松本 俊彦 自殺予防総合対策センター副センター長

## 論文の内容の要旨

### (目的)

本研究は、思春期生徒の自傷行為念慮の要因を検討し、学校臨床における予防支援法を見出すことが目標である。研究1では、自傷行為や自傷念慮と心理特性との関連を量的な調査より明らかにする。研究2では、否定的自己イメージ脚本改善を狙った予備的介入を行い、その効果を検討する。研究3では、否定的自己イメージや愛着関係認知、嫌悪系潜在記憶情報と自傷行為やメンタルヘルスとの関連を因果モデルを構築し検証する。研究4では、因果モデルに基づいたSATイメージ療法介入を行い、対象者の否定的自己イメージ改善と自傷行為念慮の予防支援の可能性を検討することが目的である。

### (対象と方法)

研究1では、2011年6月から7月に高校生818人を対象に無記名自記式質問紙調査を行った(分析対象781人、有効回収率95.5%、男311名・女456名・不明14名、全日制710人・定時制71人)。調査項目は、属性、自傷行為・自傷念慮の有無・自傷行為の頻度と依存度、健康を害する行為、心理特性7尺度であり、要因間の関連を分析した。研究2では、定時制高等学校3年生8名(男4名・女4名、 $19.63 \pm 1.06$ 歳)を対象に、20XX年2月にSAT未来自己イメージ法介入を実施し、心理特性の変化をノンパラメトリック検定で検討した。研究3では、研究1の調査項目に、親への甘え、家庭の居心地、別人格のいる感じ、自傷念慮行為頻度と自傷行為依存度加え、因果関係の仮説モデルを構築し、モデルの適合度を検討した。研究4では、公立高等学校女子1年生37人(介入群18人、統制群19人)に対し、2011年10月～12月にSAT法介入と効果測定のための調査を行い、ノンパラメトリック検定で検討した。

### (結果)

研究1より、自傷行為者12.4%、自傷念慮者6.0%であり、女子が男子に比べ、自傷行為がオッズ比3.66倍、自傷念慮はオッズ比4.99倍であり、定時制生徒は全日制生徒に比べ、自傷行為オッズ比2.18倍と有意に多かった。自傷行為・念慮はともに飲酒・喫煙など健康を害する行為との関連も見られた。心理特性に関して、自

傷行為有群（行為群）、自傷行為念慮群（念慮群）、自傷行為および念慮無群（無群）の3群で比較をした結果、3群間で心理特性尺度値に有意差がみられ、念慮群は無群と行為群の中間の得点であった。また、自傷行為・念慮は、特に、否定的自己イメージの心理特性との関連が強かった。

研究2では、介入により、否定的自己イメージに影響を与える心理指標のうち自己価値感と自己否定感は無意に改善し、自己抑制型行動特性尺度は無意ではないが改善する傾向があった。

研究3で因果関係の仮説モデルを検討したところモデルの適合度は良好であった。モデルの潜在変数間の関連は、良好な愛着関係認知が否定的自己イメージに有意な負の影響、嫌悪系潜在記憶情報が否定的自己イメージに有意な正の影響を示した。そして、否定的自己イメージが自傷行為動機とメンタルヘルスの悪さに有意な正の影響を持っていた。

研究4では介入の結果、介入群は否定的自己イメージが有意に改善し、その中の自傷行為や念慮を有す生徒は、否定的自己イメージのみならず、メンタルヘルスや自傷念慮も有意に改善した。統制群は、自傷念慮の改善がわずかに見られたが、自己イメージやメンタルヘルスの改善は見られなかった。

#### （考察）

本研究の結果からは、女子生徒への自傷念慮の予防支援を急ぐ必要が示唆された。自傷行為・念慮はともに、否定的自己イメージとの関連が強いことから、該当生徒の生き方が他者報酬型脚本になっている可能性が考えられる。他者報酬型生き方は、他者評価依存のため、本来の自己を抑制し周りの期待に応えながら他者評価を得て自分に自信を持つとする。そのため、いつも不安を抱えており自信が無いために、自己イメージが低下し、不安や抑うつが高まりやすい。自傷行為は、不快感からの解放され、快感を得るための代償行動として行われている可能性も考えられる。予防支援には、他者報酬型脚本から自己報酬型脚本への自己イメージ脚本の変容が必要である。過去の記憶情報に触れることのない「SAT 未来自己イメージ法」介入は、自己抑制型行動特性以外の自己イメージ脚本の変容には効果が見られた。そこで、自己抑制型行動特性の背後にある愛着関係認知や嫌悪系潜在記憶情報を加えたモデルを構築した。モデルからは、自傷行為の予防支援としては、メンタルヘルスに直接介入支援するよりも、否定的自己イメージに影響を与え、他者報酬型脚本を作り出している愛着関係認知や嫌悪系潜在記憶情報を支援することが必要であろうことが示唆された。さらに、モデルに基づいた集団介入による SAT イメージ療法支援が、対象者の自己イメージを肯定的に変容し、メンタルヘルスを改善しつつ、代償行動に向かう自傷念慮を減らすことが期待できた。世界で自傷に対する様々な支援プログラムが行われているが、自傷行為をなくすことができても、自分が消えたいと思う虚無感がなくなることはないために、生き方の困難さが課題として残っていることが言われている。本プログラムは、自己イメージを肯定的にし、メンタルヘルスを改善することを伴うプログラムであるところが特徴であることから、虚無感の軽減に効果をもたらす可能性がある。そして、学校臨床において、自傷行為者や自傷念慮者への支援のみならず、一般の生徒への予防支援にもなりうる可能性もあろう。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

自傷行為はその後自殺にもつながりかねないものであり、自傷行為やその念慮をもつ者に対する対策は現代社会における課題である。その取り組みは、特に学校現場において遅れており、山口氏の取り組んだ研究の視点は社会からの要請の高いものである。通常は学校現場において取り扱うことが敬遠される課題であるにもかかわらず、その現場においての疫学調査から介入研究までという包括的な研究を試みた点が評価できる。調査の方法的な限界や介入の理論的枠組みについての論理展開にもう少し工夫を要する点があるため、今後、研究を続け追究するなかで、より一般性の広い理論と方法へと概念の整理をしていくことが望ましい。全体を通して、山口氏の取り組んだ課題は、今後の社会貢献が期待できる成果といえよう。以上より、博士

論文としての水準に達していると判断された。

平成 25 年 1 月 15 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。